Tokyo Union Theological Seminary

【第11回日本伝道協議会公開講演】

聖書と信仰告白

―正典成立史をふりかえりつつ―

関　川　泰　寛

はじめに

日本基督教団信仰告白は，冒頭で「旧新約聖書は，神の霊感によりて成り，キリストを証し，福音の真理を示し，教会の拠るべき唯一の正典なり。されば聖書は聖霊によりて，神につき，救ひにつきて，全き知識を我らに与ふる神の言にして，信仰と生活との誤りなき規範なり」と告白します。すでに宗教改革者たちは，「聖書のみ」を教会改革の原理として掲げ，信仰告白中に聖書の規範性を明記してきました。例えば，ウエストミンスター信仰告白第一章は，聖書の66巻を列挙した後，「これらはすべて信仰と生活との規範たるべく，神の霊感によって与えられたものである」と告白します。また，フランス信仰告白は，「われらは，これらの諸書のなかに含まれる御言は，神から発したもので，権威をただ神から受け，それを人から受けていないことを信じる。それはすべての真理の規準であって，また神への奉仕とわれらの救いに必要なるものすべてのものを含む。ゆえにそれに追加し除いたり変更したりすることは，人にも御使いにも許されない」と告白しています。宗教改革の諸信仰告白は，聖書が救いにとって必要なすべてのものを包含しているゆえに，付加も補足も必要としないものであり，そのいわば閉じた文書が共通して神の霊感によって書かれ，その権威が神より由来するものであると言い表しています。

宗教改革の「聖書のみ」という原理をわたしたちは，これらの信仰告白の中にはっきりと読みとることができます。しかも，宗教改革の諸信仰告白は，聖

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

書の権威をはっきりと言い表すだけでなく，聖書が証言する神の言に一致する限りに於いて，古代の信条をもあわせて受け入れているところに特徴があります。たとえば，アウグスブルグの信仰告白は，第一条「神について」の冒頭で，「第一に，われわれはニケア公会議の決定いわゆるニケア信条のとおり，一致して次のように教え，また告白する」と述べます。また，フランス信仰告白は，先に言及した聖書の権威の告白に続けて，「われらは三つの信条，すなわち使徒の信条，ニカイアの信条，アタナシオスの信条を承認する。それらは神の言に一致するからである」と述べています。

ここには，宗教改革以来，わたしたちの教会が，聖書の権威と規範性とともに，信仰告白の権威と規範性を重んじてきたことがよく表れています。神学的用語を用いるならば，「規範する規範」としての聖書と「規範される規範」としての信仰告白の両方が，教会の教理と形成の源泉として重んじられてきたということです。

残念ながら，このような宗教改革以来の福音主義教会の伝統は，日本基督教団の多くの諸教会にあっては，十分に自覚されていません。現代社会に，神の言はいったいどれだけ力をもっているのか，神の言より情況が大切なのではないか，神の言に聞き礼拝するよりも，社会に意義ある活動が大切なのではないか，苦しむ者と苦しみ，泣く者と泣くそれこそ，教会とキリスト者の本来の在り方ではないか，そう声高に主張する人々や，心の中でそう呟く牧師や信徒は決して少なくないと思います。その結果，教会によって，聖書と信仰告白は，力なく，古びた着物のように脱ぎ捨てられて，教会のベンチの傍らに置き去りにされています。しかし，わたしたちは，聖書を世界の片隅に置き去りにするとき，聖書が証しする生ける主イエス・キリストをも片隅に追いやっているのです。もちろん，主イエス・キリストは，わたしたちの愚かな行為によってその存在を無に帰せしめられるような小さな方ではありません。しかし，主イエスを片隅に追いやろうとする姿勢は，主イエス以外のものをわたしたちの主としようとする罪の結果に他なりません。そのことは，主イエス・キリストを，十字架につけた人々と同じ愚かな行為を繰り返すことにはならないでしょうか。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

今，わたしたちの国と社会は，本当の救いを必要としています。主イエス・キリストの贖いの確かさと救いの喜びを，多くの人々は待ち望んでいます。神のご支配の確信によって，いかなるものの支配にも屈することのない信仰共同体の形成を人々は求めています。そのような時にこそ，プロテスタント教会が，御言葉の説教と聖礼典の正しい執行によって，教会を形成し，その教会の拠るべき唯一の正典とその正典によって規範された規範としての信仰告白の重みを改めて確認したいと願います。

本日は，いわゆる新旧約聖書のいわゆる「閉じた正典」が形成される四世紀半ばのアレキサンドリア教会で起こった出来事に目を留めたいと思います。アタナシオスの記した第39復活祭書簡をめぐるいくつかの歴史的事実から，正典化という事実の背後にあるもの，とりわけ聖書と信仰告白の密接な関係について言及してみたいと思います。

1．聖　　書

聖書は，旧約聖書39巻，新約聖書27巻あわせて66巻からなるキリスト教の正典（カノン）です。旧約聖書は，古代イスラエルの歴史の中で書かれた諸文書の集成で，元来はユダヤ教の聖典でした。キリスト教はユダヤ教の聖典を引き継ぎながら，1世紀半ばから2世紀初頭に成立した固有の文書を生み出しました。それが新約聖書です。イスラエルの歴史を導き，その民に約束を与えた神が，御子イエス・キリストをこの世界に遣わし，決定的な仕方で，その約束を実現して下さったことを伝えるためです。

19世紀以降，聖書の歴史批評的な研究が盛んになると，聖書もまた古典の一つであり，それが書かれた歴史に制約された文書であると考えられるようになりました。そのために聖書の歴史的な信憑性に疑問を持つ人々が出てきました。そればかりでなく，聖書正典の成立の過程に作用した歴史的な諸要因が指摘され，聖書が神の霊感によって書かれたという信仰告白の内容の歴史性が問われるようになります。

さらに，ある人々は，新約正典27巻の成立は，古代末期の「正統教会」が自

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

己の権威を守り，その正統性を確立するという目的のためであったと主張します。このような立場から，しかもそのような目的を否定的に評価すると，聖書諸文書は，教会の定めた信仰告白の権威からも，また正典という考え方そのものからも解き放たれて，はじめて歴史のイエスの「真正な」言葉を語るものとなり，さらにその言葉を語られた歴史のイエスに従うことが救済の道であるという考えが生まれます。このような考え方は，一見「教理」からも教会の「権威」からも自由なような見えますが，自分たちのかなり恣意的な「救済論」を前提としています。

わたしたちは，聖書の学問研究そのものを恐れたり忌避したりする必要はまったくありませんが，上述のような学問の仮説の提示が，教会が代々示してきた聖書の理解や聖書が生ける神の言葉であるという教会の確信をいささかも揺るがすものではないことも同時に知っていなければなりません。

わたしたちの教会は，次のような聖書の理解に立っています。第一にわたしたちは，聖書は，特定の時代に書かれた「人間の言葉」であるということを承認します。他の古典と同じように一定の歴史状況の中で，時代の環境の制約を受けて成立したものです。しかし，同時に聖書は科学的な知識を伝達する書物でもなければ，歴史的な情報を伝える書物でもなく，神がイエス・キリストにおいて御自身を啓示されたことを証言する書物であると考えます。第二に，聖書は，さまざまな著者によって書かれ，個々の文書の成立以前には固有の口頭伝承の集成が存在し，それぞれ生活の座を持っているゆえに，多様な思想や神学が満ちています。にもかかわらず，聖書はイエス・キリストという歴史的な人格において，絶対者であり超越者である神が御自身を啓示し，しかも御子の生涯と死と復活を通して人間を救済へと導いて下さったことを証言する点では，統一性をもっています。この多様性と統一性の承認が，聖書の理解の出発点です。第三に，聖書は，「すべて神の霊の導きの下に書かれ，人を教え，戒め，誤りを正し，義に導く訓練をするうえに有益です」（テモテへの手紙（二）3：16）と記されているように，聖書は，人間が書き記したものですが，同時に代々の教会はそれらが神の導きによってなされたものであることを信じます。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

第四に，わたしたちは，いわゆる聖書主義の立場や逐語霊感説（ファンダメンタリズム）の立場は取りません。聖書は，わたしたちの教会が拠ってたつところの信仰告白を規範する規範です。換言すれば，聖書と信仰告白を規準として教会の信仰と制度はつくられていきます。

2．信仰告白

聖書は，主イエス・キリストの生涯と教え，さらに十字架，復活と高挙を証言する書物です。しかし，すでに指摘したように，各文書は多様な神学や思想を含んでいます。そのため聖書の複雑多岐にわたる内容を整序し，そこから導かれる教会の基本的な教えを記した信仰告白が生み出されることになります。

元来信仰告白は，古代の教会の洗礼式を生活の座として発展してきたものです。公同的な信仰告白はいずれも，三位一体的な定式を持ち，讃美頌栄的な言葉をその特色としています。わたしたちがよく知っている使徒信条やニカイア信条は，このような特質を備えています。聖書それ自体が，ある意味で信仰告白です，例えば，聖書の中にすでに申命記６章や。コリントの信徒への手紙(一)15章３節以下やマタイによる福音書16章の使徒ペトロの言葉には，信仰告白の言葉が内包されていることがわかります。

１世紀から２世紀にかけての使徒教父や２世紀か３世紀の弁証家，さらにヒッポリュトス，エイレナイオスやテルトゥリアヌス，そして４世紀のニカイアの神学たちの著作には信条の萌芽のような言葉がたくさん観察されます。信仰告白は，個人の信仰を何かしばりつけるような言葉ではなくて，古代の教会において水辺で信仰を言い表して，神の霊の注ぎを受けて，新しいキリスト者が生まれる息を飲むような瞬間の言葉（試問的信条）なのです。この洗礼式で用いられた言葉が，やがて３世紀半ばに洗礼志願者教育で用いられる「宣言的信条」に整えられ，古代教会で広く用いられるようになっていったと考えられています。

さらに，４世紀に入って，キリスト教がローマ帝国に公認されると，キリスト教会内部で神学論争が生じ，教会分裂の危機に立った時，会議で作成される

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

信条が生まれます。そのような信条の最初のものは，325年のニカイア会議で作成された「原ニカイア信条」です。さらに381年コンスタンティノポリス会議では，いわゆるニカイア信条が生まれます。これらの信仰告白は，会議で作成はされますが，いずれも古代教会の洗礼式で用いられた洗礼信条の言葉が原型となっており，讃美頌栄的な性格を色濃く持っています。しかし，さらに加えて，318年から始まるアレイオス論争を背景にして，御子イエス・キリストは，父なる神よりも劣った一被造物であり，「御子の存在しないときがあった」という主張を斥けるものとなっています。

信仰告白は，聖書の証言する父・子・聖霊なる神を讃美する言葉であると同時に，教会が拠って立つところの普遍的な「公同信仰」を簡潔に言い表したものです。古代の教会の人々は，新しく採択された信条に署名をして，それらを受け入れるしるしをはっきりと示し，信条にいわば拘束性を認めました。宗教改革の諸信仰告白は，いずれも古代信条の公同信仰を受け継ぎながら，三位一体の神への信仰を告白すると同時に，正典である聖書が神の霊感を受けて書かれたことをはっきりと記しています。このような古代教会における信条の形成は，新約聖書各文書の成立と正典化と平行して起こっています。教会は，もとより，正典，信仰，職制の三つの座標軸によって，はじめてその具体的で可視的な姿を見せますから，そのことは当然と言えます。そこで次に正典と信仰告白の密接不可分な関係を考えてみましょう。

3．新約聖書正典の成立と信仰告白

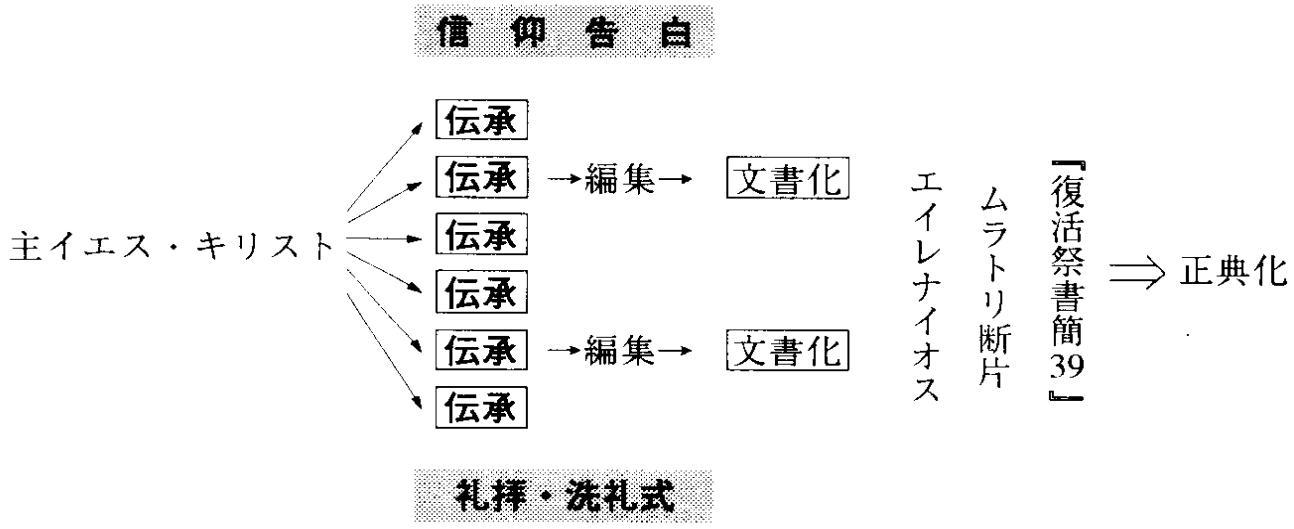
新約聖書諸文書は，1世紀半ばから2世紀半ばにかけて相次いで成立します。コリントの信徒への手紙(一)15章3節以下が示していますように，主イエスの十字架と復活そして弟子たちへの顕現という出来事が宣べ伝えられ，教会の教えの核になっていきます。その際，教会共同体は，イエス・キリストの出来事を現実として伝えるサクラメンタルな共同体として形成されました。この共同体が礼拝において，聖書の言葉と言葉の説教を通して，さらには可視的な言葉である聖餐と洗礼を通して，復活の主の現臨を経験し続けます。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

それでは，新約聖書27文書は，どのような規準で，なぜ選ばれて「正典」となったのでしょうか。この問題は，簡単には答えが与えられません。限られた歴史史料から，答えを推量しなければならないからです。ある学者は，新約聖書そのものの中にすでに正典という考え方があるのであり，4世紀にだいたいにおいて終了する正典化は，その延長にすぎないと考えます。またある学者は，キリスト教には元来正典化をめざすという動機も意図もなかったのだが，二世紀にマルキオンやグノーシス主義，モンタヌス主義といった異端が出現し，独自の「正典」概念を主張した結果，キリスト教会の側でも，それに答えるかたちで正典化を進めたと説明します。またある人は，正典化は，コンスタンティヌス体制の中で，正統と異端を識別するプロセスの中で生じた事態であり，結局は「正統教会」の権威からかなり恣意的に正典化が起こったのだと見ます。

これらの見解にはそれぞれ正当性を主張しうる根拠が含まれていると思いますが，歴史というものがいくつかの要因を複合的に含みながら，それらに触発されて進展していくのが常ですから，一つの要因に還元するのではなく，複数の要因を考える方がより真実に近いのではないかと思われます。とりわけ，古代教会においては，正典化と信仰告白の成立は平行して起こった現象であり，どちらか一方だけを切り離して説明することは難しいように思います。そこで以下のような図を描いて，複雑な状況を説明してみましょう。



この表が示しているのは，まず主イエス・キリストにおける神の自己啓示が，

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

すべての新約聖書文書の出発点であるということです。この啓示の出来事が，諸伝承を生み，それらは担い手たちによって，伝達され，やがて編集されて文書化されていきます。かくして伝承から文書化そしてそれがまとめられて新約聖書の一つの文書が形成されます。2世紀半ばのユスティノス著作からは，後に正典となる諸福音書には，唯一の権威が未だ与えられていないこと，さらにかれが，いくつかの福音書からの断片や口頭伝承，イエスの言葉の集成を知っていたことが伺えます。また，2世紀後半のエイレナイオスでは，『異端反駁』3巻が4福音書，使徒言行録，パウロ書簡に言及し，福音書がなぜ4つでなければならないかを丁寧に論じています。使徒性が，権威の根拠であることも本書に示されています。このように，一定の基準によって集められた文書は，2世紀から3世紀にかけてさまざまな形態で存在していました。パウロの手紙は一つに集められ，それ自体が一種の正典化された部分として用いられていたとも考えられます。また文書の中には最後まで正典として確定されずに重んじられた文書もありました。おそらく4世紀初頭まではそのような状況が続いたと考えられます。2世紀の正典化の過程を知る上できわめて重要な史料に，ムラトリ断片があります。ここには，四つの福音書とその他の新約聖書諸文書のリストが出てきます，つまり，2世紀後半までには，そのような正典化への方向づけは教会内に存在していたと考えられます。やがて，4世紀半ばになると，すなわち，キリスト教がローマの公認宗教となってからは，教会内部に正統と異端の論争が生じ，一層正典化に拍車がかかります。

わたしは，新約聖書27文書全体がはじめて史料に顔を出す，アタナシオス『復活祭書簡39』（367年）から，正典化がこの時代に進んだ背景とそこから得られる現代の教訓を学んでみたいと考えます。

4．アタナシオスの『復活祭書簡39』から

アタナシオス（298～373年）は，アレキサンドリアの司教であり，ニカイア信条の成立とニカイア正統神学の確立に寄与した重要な人物です。彼は，毎年復活祭前に，その期日を決定する書簡をアレキサンドリア教区の全聖職者に

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

宛てて書き送ったと言われています。その第39書簡に，教会の歴史上はじめて今日わたしたちが知っている新約聖書27巻の書名が出てきます。

当時のアレキサンドリアは，318年のアレイオス論争勃発以来，アレイオス派，メレティオス派そして聖マルコ司教座の三つの勢力が相争っていました。今日の研究では，メレティオス派は，ディオクレティアヌス帝の大迫害によって殉教したり，地下に潜った司教たちの代わりに，リュコポリスのメレティオスという人物が自分の勢力下の聖職者を勝手に司祭や司教に任命し，聖マルコ司教座のヒエラルヒアの秩序を崩すような行為に走りました。これに対し，アレイオス派は，御子イエス・キリストが御父なる神よりも劣った一被造物であり，「御子が存在しない時があった」と主張しました。アレイオス派は，アレキサンドリアの一種の学問サークルであり，優れたカリスマを持つ教師を中心に，禁欲的な学問集団を形成していたと考えられます。この学問サークルにおいては，その指導者や教師は，その「つとめ」に従ってではなく，復活の主の幻や神秘的経験などの宗教的，知的，道徳的な神授の能力によって権威が継承されます。そして，教師は，七十人訳聖書の解釈と新約聖書諸文書の両方によって，学生を導くことでその能力を発揮しました。これら学問サークルに属する人々は，パウロ書簡などのいくつかのキリスト教著作を，研究の課題とするために，ひとまとまりの文書に編纂することもありましたが，グノーシスの教師たちと同じく，概して閉じた正典には興味を示しませんでした。

318年のアレイオス論争勃発は，単なる神学論争に止まりませんでした。公認されたキリスト教会において，どの勢力が，現実の政治においてもどれほどヘゲモニーを取り，皇帝の支持を取りつけうるかが大きな関心となったのです。そのような中で，メレテイオス派とアレイオス派は手を結び，聖書に基づく正統神学を脅かし始めます。彼らは，聖書の諸文書をもまた選択的に読み，聖書の言葉を「霊的に」解釈しうる知恵の教師を尊重し，閉ざされた「正典」という考え方に反対しました。例えば，メレテイオス派は，真の教会は，殉教者の教会であり，このことを証言するのは，『イザヤの殉教と昇天』などいくつかの外典であると考えました。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

これに対して，アタナシオスは，アレイオス派が尊重するような知恵の教師による解釈の権威の代わりに，御言葉の権威をはっきりと示すことに専心しました。すでに，彼は352年の『復活祭書簡24』の中で，「聖者の言葉」と「人間の発明した言葉」とを対比しています。「聖者」（つまり新約聖書の記者たち）が，「変更せずに」神の受肉した言葉から聞いたことを伝えていると主張しています。つまり，アタナシオスは，キリスト教教理は受肉した言葉によって教えられた不可変の記録であると考えているのです。アタナシオスは，神の言葉は，人間の言葉とは異なって，それについて何かを学んだり解釈したりする必要はなく，本質的に教師であると考えました。アタナシオスは，正典を「神的」（テイア）あるいは「神の霊感を受けたもの」（テオプネウスタ）と呼び，それらは「はじめから御言葉の目撃者であり，助力者であった人々」によって「わたしたちの先祖に伝承されてきた」と言います。それ以外の書物は，どれほど有益であろうと聖書とは呼べないと考えました。

四世紀後半にキリスト教の正典が，最終的に定められ，教会で読まれ，礼拝に用いられ，人々の心を慰め，さらに諸信条の基礎になって，確かに教会形成の土台となった聖書諸文書は，表面的に見るならば，教会によって定められたものですが，そこには明確に人間的な権威や解釈に対して，神によって定められ，神によって霊感を受けた書物の権威を守ることに全力を傾けた信仰者の営為が存在します。

これを恣意的な教会の独善であると信仰を持たない人々は言うでしょう。あるいは当時のアレイオス派に属する人々にように，一種の学問サークルに属して，教会の営みにひたすら抵抗する人々も同じように正典概念を否定的に考えるでしょう。

しかし，わたしたちが，アタナシオスをはじめとするニカイア正統神学の遺産を受け継ぎながら，聖書と信仰告白に基づく教会の形成を目指すなら，聖書正典の成立に神の深い摂理を読みとらざるを得ません。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

5．聖書と信仰告白に生きる

いつの時代にあっても，キリスト者は聖書と信仰告白に生きる生活を送ります。聖書は，個々人の信仰生活において読まれますが，同時に教会の公の礼拝において読まれ，その聖書の言葉に基づいて説教がなされます。第二スイス信条の有名な言葉「御言葉の説教がすなわち神の言葉である」に示されるように，礼拝に出席する者は，語られた聖書の言葉が「神語り給う」ものであるという恵みの出来事を経験します。このことを「説教はサクラメンタルなものである」と表現する場合もあります。それは，聖礼典が目に見える言葉であるパンとぶどう酒，あるいは水という物素を通して主の現臨を示すのと同じように，説教が見えない言葉を通して復活の主の現臨を指し示すからです。そして，信仰告白も同じように，現臨する三位一体の神を讃美頌栄する言葉です。従って，熊野義孝（くまのよしたか）は，信仰告白は説教と聖礼典は同根のものであると言いました。

キリスト者として生きるわたしたちは，等しくこの点を自覚することが大切です。その上で，聖書と信仰告白の土台の上に教会が，形成されることを絶えず祈り求めなければなりません。「規範する規範」である聖書と「規範される規範」である信仰告白の上に教会が建てられるとは，具体的には十字架にかかり，よみがえられた主イエス・キリストにおいて啓示された神のみを神とする共同体をこの地上に建てるということです。人間的な知恵や権威は，一切教会の土台とはならないということです。

そして，教会が聖書と信仰告白を土台として建てられていくとき，何よりわたしたちの礼拝の姿勢が変わります。聖書と信仰告白の頌栄性にわたしたち信仰者の姿勢も正されていきます。正典を重んじるということも，そのような姿勢に生きることと関係します。アレイオス派は，タレイア（饗宴歌）と呼ばれる俗謡で，自分たちが受け継いだ「信仰の奥義」に関して，「神によって選ばれ，神を見分けることのできる者らの信仰によれば，さらにまた真理を賦与し，神の聖なる霊に心開く神の聖なる子らによれば，これらは，知恵に与った人々からわたしが学んだ事柄である」と歌いました。ここには，知恵に参与し，神

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

によって教示される信仰の秘義を知る「わたし」が全面に出てきます。「わたし」が信仰の規準であり，「わたし」が神について知り語るのです。このようなアレイオス神学そのものの否定の上にニカイア神学は形成されていったことを忘れることはできません。

（せきかわ　やすひろ）

NII-Electronic Library Service